

たがさぽからのお知らせ

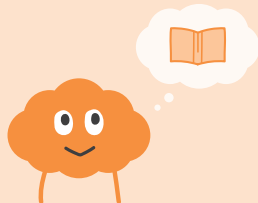
たがさぽが企画する「一歩ふみだすきっかけ」をご紹介します

「たがさぽ文庫」のご案内

たがさぽの図書スペース「たがさぽ文庫」に新しい本が入りました。「たがさぽ文庫」には、市民活動やNPO、ボランティアやまちづくりなど、みなさんの活動のヒントになるような書籍を中心に、1,200冊近い蔵書を取り揃えています。中には、一般の書店や図書館ではあまり目にしない本もあります。貸し出しも行っていますので、市民活動に関心のある方、すでに活動している方、これから何か活動をはじめたいと思っている方は、ぜひご利用ください。

たがさぽ文庫 本の借り方

- 1 利用登録
- 2 本を選ぶ(1回に2冊まで)
- 3 窓口で貸出カードに記入
- 4 2週間以内に返却



新しい本が
入りました！

NPO法人の
すべて

社団・財団・
NPO法人の
運営・会計・税務

一般社団法人
一般財団法人の実務

マンガでわかる
LGBTQ+

認知症世界の
歩き方

オンラインの
場づくり
自主研究ノート

オンラインでも
アイスブレイク！
ベスト50

取材・執筆・推敲
書く人の教科書

ヒントfromたがさぽPress

たがさぽのブログから、地域づくりに役立つ記事をご紹介します！

01

2021年2月23日(火)掲載

地域課題を考える
「ユニバーサルなまち」とは？
TSR2020③

02

2021年11月25日(木)掲載

毛糸で紡ぐコミュニティ、
Yarn Aliveハウスに
行ってきました

03

2021年12月2日(木)掲載

手話サークルって
どんなところ？

“tag”のアンケートのお願い



今後の誌面づくりの参考にしたいと思いますので、ぜひご協力をお願いします！
また、以下のような情報もお待ちしております！
○自分たちの団体を取材してほしい
○ユニークな活動や、地域のためにがんばっている団体・人を知っている
○こんな話題を取り上げてほしい

“たがさぽPress”とは？

たがさぽスタッフによるブログ。
興味がわいたら「たがさぽPress」へ！



<https://blog.canpan.info/tagasapo/>



「tag」には、多賀城(tagajo)の頭3文字、
みんながタッグを組んで地域をつくる、
多賀城に新しいタグ(価値)をつける、という意味が込められています。



@tagasapo

たがさぽのツイッターへの
フォローをお願いします！



<https://www.tagasapo.org/>

たがさぽのホームページは
こちらへアクセス！



発行:多賀城市市民活動サポートセンター

〒985-0873 宮城県多賀城市中央2丁目25-3

(多賀城市文化センター北隣・上下水道部向かい)

電話:022-368-7745 / FAX:022-309-3706

編集:NPO法人せんだい・みやぎNPOセンター



ヒト・コト・モノ
をお届けます

「多賀城発で多賀城着。」

「tag(たっぐ)」は多賀城をもっとよいまちにしていきたい、
社会や地域のために何か活動したいという方を応援するフリーペーパーです。



2021 winter
vol.96
take free

南門復元に対する市民の思い



完成予想図

現在、市が復元工事を進めている多賀城南門。

NPOゲートシティ多賀城は、復元実現のため、コスモスやミヤギノハギの植栽で政庁南大路を示す事業など、さまざまな活動で計画を後押ししてきました。代表の高倉敏明さんは「市民に、多賀城の歴史や史跡に関心を持ち、親しんでほしいという思いがあった」とふりかえります。

多賀城南門復元の実現を目指す市民の会は、NPOゲートシティ多賀城と共に署名活動を行いました。事務局の星栄之進さんは「活動が一步步づつ実を結んでいる」と実感しているそうです。

観光による地域活性化をテーマに活動しているコミュニティカフェ・タガの柵の松村正子さんは「南門を復元した意味・価値を伝えたい」と話しています。

市民の期待と願いが込められた多賀城南門。史跡のまちと復興のシンボルとして、多賀城創建1300年の節目(2024年)によりがえります。



▲見学会では、作業現場に入って、復元途中の南門を間近で見ることができました



代表 高倉 敏明さん

南門が市民の交流の場として生かせるよう、団体としても文化財でまちを盛り上げたいです。

【NPOゲートシティ多賀城】

多賀城の歴史的風土を継承し、文化財を生かしたまちづくりのビジョンを提示するとともに、市民の歴史的遺産への関心・愛着の醸成を目指して活動しています。

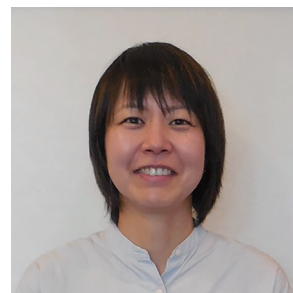


事務局 星 栄之進さん

見学会にたくさんの市民が足を運んでいました。建造物としての圧倒的な存在感を実感してほしいです。周辺エリアを含めて、親しみやすい場所になればうれしいです。

【多賀城南門復元の実現を目指す市民の会】

講演会や史跡探索ツアーなどを通して、多賀城の歴史や文化遺産に対する市民の意識を高める啓発活動を推進しています。



松村 正子さん

市民も観光客も、多賀城の歴史を知らない人が大半。造って終わりではなく、もっと多賀城の歴史に興味を持ってもらえる工夫が出来たらと思います。

【タガの柵】

多賀城のガイドツアーやイベントなどを開催しているコミュニティカフェ。史跡などを地域の資源として生かしながらかつ活動しています。

聴覚障害者の困りごとに心を向け生まれる配慮

多賀城市の聴覚障害者(身体障害者手帳所持者数)は125人(2021年4月1日時点)。彼らにとって“やさしいまち”とは？多賀城市身体障害者福祉協会聴覚部の岩城栄子さんと石森秋夫さん、多賀城手話サークル「あすなる」の加藤たみ子さんから話をうかがいました。

伝えたい・理解したい 相手に合わせたコミュニケーションを

岩城さんは生まれつき耳が聞こえず、石森さんは幼少のころにかかった中耳炎が原因で聴覚を失いました。聴覚障害は、聞こえづらい、または全く聞こえない障害のことを言います。聞こえなくなった時期や聞こえ方は一人ひとり違うため、コミュニケーションのとり方も人によってさまざまです。育った環境や経験、年齢も影響します。したがって、場面や相手に応じて、コミュニケーション手段を併用したり使い分けたりしています。

手話を使ったコミュニケーションでは、手の動きだけではなく表情や口の形も見て相手の伝えたいことを読み取ります。マスク着用が必須となったコロナ禍で、不便を感じていないかお聞きすると、岩城さんは「確かに不便ですが、マスクがなくても早口で話されるとわからないことが多いです」と話します。お互いが理解しあうためには、相手を思いやる気持ちで、相手に合わせる「配慮」が必要なのかもしれません。

ゲートボールが趣味の石森さんは、健聴者と一緒に練習に参加していますが、いつもの仲間となら身振り手振りでもだいたいのは通じるそうです。伝えたい・理解したいという気持ちが意思の疎通につながっています。



多賀城市身体障害者福祉協会聴覚部代表の岩城さん。相手に通じなかった言葉は、指で文字を書き伝えます

想像力で寄り添う「安心」のある社会に

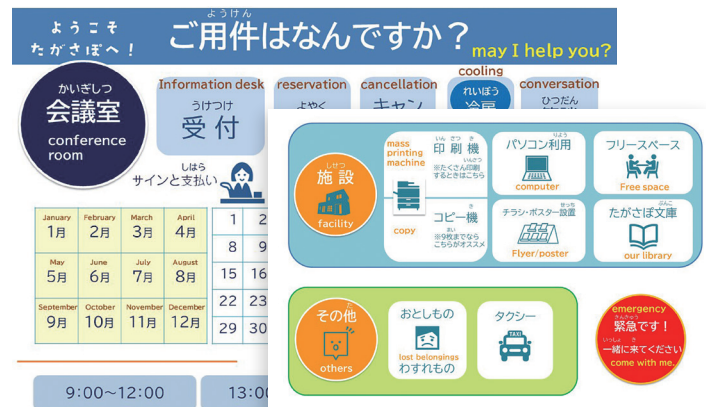
スマートフォンなどを利用した救急・火事の通報ができるNet119緊急通報システムや電話リレーサービスなど、聴覚障害者へ向けたサポートツールが増えていますが、どちらもインターネット環境が必要です。緊急時にインターネット環境があるとは限らず、意思疎通のための工夫や相手に合わせた配慮をすることは大切です。

手話通訳ボランティアとして同席した加藤さんは、「市内施設などにコミュニケーション支援ボードが設置されるなど、少しずつ社会が変わってきていますが、聞こえない人の意思を読み取るのは簡単ではありません。繰り返し確認して分かることもあります。手話に関心を持ち、積極的に聴覚障害者とコミュニケーションをとる人が増えるといいですね」と話しています。このように関心を持ちお互いを理解しようとするのが、暮らしやすい社会の一步につながります。

お店や施設で「筆談できます」「手話ができるスタッフがいます」などの案内があると、聞こえない・聞こえにくい人は安心して物事を尋ねることができます。耳が聞こえない人に限らず、人々の多様性を認め合い、あらゆる場面で想像力を持ちどのような配慮が必要か考えてみる。それがユニバーサルな社会へ近づくことなのかもしれません。



▲石森さん(左)は、岩城さん(中央)と手話通訳ボランティアの加藤さん(右)の手話をしっかりと見て二人の話の内容を読み取ります



▲たがさばで8月から設置し活用しているコミュニケーション支援ボード

市民活動 はじまりのはじまり

被災した住民が自らの生きる目標に。誰かを助ける力に。活動拠点「Yarn Aliveハウス」では、そんな想いから作品が編まれています。



毛糸がつなぐ心と心 ～編み物が生きる目標に 支え合う力に～

テディ・サーカさんが七ヶ浜町に移住して4年目、東日本大震災が発生しました。サーカさんの頭をよぎったのは、1995年に起きた阪神・淡路大震災の時、将来が見えないと嘆いて自ら命を絶つ人が少なかったという話。二度とそのような人を出してはいけない、そんな思いから、大好きな編み物を生かして何かしたいと考え、2011年6月、「Yarn Alive」を立ち上げました。

編み物が得意な方、初めての方、リハビリとして手を動かしたい方など、口コミでたくさんの人が集まりました。編み物を通じた交流が、被災してふさぎ込んでいる方たちの生きがいとなったそうです。

編みあがった毛布を気仙沼の被災者に届けて以来、これまで熊本やモザンビーク、フィリピンなどに向けて、手編みのニットを寄付し、支援活動を続けています。

Yarn Aliveハウスにはたくさんの写真が飾られています。そこに写っているのは、支援先で編み物を受け取った方々。その笑顔は、次に作品を編む原動力となっています。

「自分のためでもいいし、誰かのためでもいい。できた作品で誰かを助けたい。そういう生きている理由がないと人生をギブアップする人もいる」とサーカさんは話します。

世界中から寄付で集まったたくさんの毛糸たち。次はどんな作品になって、支援を必要としている人のもとに届けられるのでしょうか。



▲ Yarn＝毛糸 Alive＝生き生き こんな想いが込められたYarn Aliveハウス。外壁は気持ちが明るくなる「赤」。色は生活にも大きな影響を与えます



▲ お互いに作品を見せ合いっこしながら、わからないところを教え合いながら…。和やかに時間は流れます



▲「お話ししながらみんなで編み物をして過ごせるのが一番」と語る創設者のテディ・サーカさん

お役立ちアラカルト

寄付月間 — 欲しい未来へ、寄付を贈ろう。 —

寄付月間は、NPO、大学、企業、行政などが集い、多くの人が改めて寄付について考え、行動するきっかけとなることを目指して、毎年12月の1ヵ月間、全国規模で行われている啓発キャンペーンです。

賛同企画をSNSでシェアするだけで寄付ができたり、応援したい団体を見つけて募金ができたり、参加方法や寄付方法はさまざま。ぜひ、この機会にアクションを起こしてみませんか？



寄付月間
ホームページ



寄付月間
Twitter



寄付月間
Facebook